

セリーヌ『なしくずしの死』英語訳の比較検討： ジョン・マークス訳とラルフ・マンハイム訳

木下，樹親
九州大学大学院人文科学研究院：専門研究員

<https://doi.org/10.15017/1430753>

出版情報：Stella. 32, pp.205-212, 2013-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



セリヌ 『なしくずしの死』 英語訳の比較検討

——ジョン・マークス訳とラルフ・マンハイム訳——

木 下 樹 親

フランス語の知識をもたない者が母語への未訳作品を読もうとするとき、当人の外国語習得状況にもよるが、最も接近しやすいのは英訳であろう。セリヌのばあい、文壇に衝撃をもたらしたデビュー長編『夜の果てへの旅』と、猥雑描写に批判が集中した第2長編『なしくずしの死』（1932年および36年。以下、それぞれ『旅』『死』と略）の英訳はイギリス人ジョン・マークスによって、仏語オリジナルの刊行後比較的早く世に出、英語圏はもとより、それ以外の国でも広く親しまれてきた。この翻訳にたいし、時を経て提示されたのがドイツ出身のアメリカ人ラルフ・マンハイムによる新訳である¹⁾。両訳を比較すると、時代の状況や訳者の方針の相違にもとづく差異が多く認められる。なかにはセリヌ文学の根幹にかかわるものさえあると言ってよい。『旅』については考察がすでにあるので、本稿では『死』を中心に両英訳の特徴と問題点を概観してみたい²⁾。

＊

セリヌ作品の英訳の変遷を簡単に辿っておこう。まず1934年にマークス訳『旅』が英米両国で出版された。ついで38年、マークス訳『死』が米英で刊行。いずれの訳本も49年から66年まで、版元と版形を変えつつ数回再刊されている。そして66年、マンハイムによる新訳『死』がアメリカで出版。さらに83年、マンハイム新訳『旅』がアメリカで刊出された。なお、この間マンハイムは『城から城』『北』『リゴドン』から成る〈ドイツ3部作〉も矢継ぎ早に翻訳している（仏語原典・英訳の順で示すと、それぞれ57-68年、60-72年、69-73年の出版）³⁾。

まずマークス訳『旅』について一言しなければならない。というのもマンハイム新訳『旅』刊行までの半世紀、英語圏の読者、とりわけ「ヘンリー・ミラーからフィリップ・ロスに至る」アメリカの作家たちに影響を及ぼしたにもかかわらず⁴⁾、実はいくつかの問題をかかえた翻訳であったからだ。それを如実に示す文章の一例――

その力の大半は英語になって失われている。それはほとんど翻訳不可能なのだ……。マークス氏は誠実に勇敢に努力したが、成功していない。ほとんどと言っていいほど誤訳はないが、彼の翻訳には生命が通っていない。フランス語の豊かさや繊細で困難なリズムを完全に捉え損ねている。それに沢山の削除がある。⁵⁾

これはラブレーの名訳者として知られるサミュエル・プトナムによる批判である。実際には誤読にもとづく誤訳もあるが、言葉の生命やリズムを「捉え損ねている」という指摘は的を射ている。マンハイム新訳『旅』の刊行直後、両訳を比較したスタンフォード・リュスが訳語の選択について明快に論じているので詳述は避けるが、マークスには総じて穏当な表現をもちいる傾向があったことは間違いない⁶⁾。このことは、「沢山の削除」ともども、本稿が扱う『死』においていっそう顕著になる。

はじめに『死』の書き出しの段落を比較してみたい。セリーヌ自身を思わせる主人公、場末の医師兼作家フェルディナンの独白である――

Nous voici encore seuls. Tout cela est si lent, si lourd, si triste... Bientôt je serai vieux. Et ce sera enfin fini. Il est venu tant de monde dans ma chambre. Ils ont dit des choses. Ils ne m'ont pas dit grand'chose. Ils sont partis. Ils sont devenus vieux, misérables et lents, chacun dans un coin du monde. [MC, 12 (511)]

We are alone once again. It's all so long, so slow ... and sad. I shall be old soon - then it'll be over. So many people have come in here, to my room. They've talked; they've not said much. They've gone away. They have grown old, miserably old and slow, each in some corner of the world. [JM, 1]

Here we are, alone again. It's all so slow, so heavy, so sad ... I'll be old soon. Then at last it will be over. So many people have come into my room. They've talked. They haven't said much. They've gone away. They've grown old,

wretched, sluggish, each in some corner of the world. [RM, 16]

まったく、またはほぼ同じ訳文が多いことから、マンハイムが先行訳を参照しつつ訳出を進めたであろうことは想像に難くない。敢えて差異を探ると、2 番目と最後の文の比較から、マークスよりマンハイムのほうが原文により忠実で的確な訳語を選択しているとは言えよう。だがこの箇所を見るかぎり、両訳者とも原文を正確に捉えており、さほど大きな問題はないように思われる。

それでは次の描写はどうだろうか――

«Hurray! Hurray! Garçon magnifique!» qu'elle me criait en plein élan... «Hurray! Tu vas lui crever l'oignon! y aura du monde dans les étoiles! L'éternité va lui sortir! Vive la Sience chrétienne!» [MC, 38 (524). 下線引用者、以下同様]

"Hurray! Hurrah! You gorgeous brute!" she bawled at me in a frenzy of happiness. "Attaboy! Kill her! Split her in two! Oh, stars in Heaven and love's light on earth! Hurray for Christian Science!" [JM, 26]

"Hurray! Hurray!" she shouts without even stopping her car. "Great stuff! You'll crack her ass open. You'll send her sky-high. You'll knock the eternity out of her. Hurray for Christian Science!" [RM, 38]

これは物語の本筋に入る直前、フェルディナンが秘書の姪ミレイユを追いかけているうちに発熱による錯乱状態に陥り、夢か現か定かならぬ「イギリス婆さん」に発破をかけられる一節である。超現実的光景が展開するなか、彼らは暴徒と化した群衆を巻き込みコンコルド広場に至る。なにより着目したいのは下線部だ。仏語原文での単語は「女性性器」の用例をもつ卑語でもあるが⁷⁾、一般的には「肛門」を意味する俗語である。マンハイムがその意味を確実に捉え逐語訳しているのにたいし、マークスは別様の表現をもちいている。「あいつを殺せ!」――しかしこれはけっして誤訳ではなく、むしろ原文に対応する英単語の使用を避けるための意識と言うべきであろう。30 年代のイギリスにおける宗教・倫理に照らすと、「肛門」はタブーそのものであり、訳者の苦心は考慮せねばなるまい。とはいえ他の箇所、マークスの「熱狂的な幸福で」や「天には星が地には愛の光が!」は不正確または不明瞭な訳文としか言えず、読者に疑問符を投げかけるものである。

ところで両者の翻訳底本の相違も踏まえなければならない。マークスがドノエル・エ・スティール書店刊の初版に準拠したのにたいし、マンハイムは第2次大戦後セリーヌの版權を取得したガリマール書店版を使用したのだが、前者の版にはひとつの特徴があった。出版主ロベール・ドノエルがセリーヌの承諾を得たうえできわどい性的描写を自主検閲し、その箇所を空白のままに刊行したのだ。フェルディナン少年が奉公先のゴルロージュ夫人に誘惑されて性行為に耽るシーンが代表例である⁸⁾。しかしながらマークスは空白を等閑視し、穏健な表現を補いながら前後をつなげて訳出した⁹⁾。これもまたもちろん倫理的配慮にもとづく所作であったが、不実な、ひいては改竄とさえ見なしうる訳ではなかろうか。いっぽうマンハイムは、戦後セリーヌが空白部を書き改めた版を底本としており、問題のない訳文に至っている。

同様の例を『死』における最も冒瀆的な描写で確認しよう。物語の終盤、山師的発明家クルシアルが猟銃自殺を遂げた後、かつて沈没船の財宝を探索するための釣鐘型潜水器コンクールを実施したさい、出資者の名乗りを挙げたフルーリ教会参事が再登場した場面である。なおマンハイム訳がきわめて忠実なため、ここでは仏語原文の引用を省く¹⁰⁾ ——

He wouldn't have it recovered at any price. We'd got to stop him some how. I charged in with a blind rush. I went mad... at random. I collided straight into the brute. He toppled and flounced – crash, smack! – against the wall. I had a flying start, I was almost on him. But I stopped myself, braking hard, I heaved myself upright. I drew back. I was well in control. Crikey! I didn't want him to go nosediving into that puddle! I'd all my wits about me. [JM, 561]

He won't let me cover him ... *He sticks his fingers into the wound ... He plunges both hands into the meat ... he digs into all the holes ... He tears away the soft edges ... He poked around ... He gets stuck ... His wrist is caught in the bones ... Crack! ... He tugs ... He struggles like in a trap ... Some kind of pouch bursts ... The juice pours out ... it gushes all over the place ... all full of brains and blood ... splashing ... He manages to get his hand out ... I get the sauce full in the face ... I can't see a thing ... I flail around ... The candle's out ... He's still yelling ... I've got to stop him! ... I can't see him ... I lose my head ... I lunge at him ... by dead reckoning ... I hit him against the wall ... smash! boom! ... I've got my momentum ... I'm coming after him ... but I straighten out ... I brake, I*

get away from him ... I'm very careful ... Hell! ... I don't want him conking out on account of me ... I wipe my eyes ... I keep my presence of mind ... [RM, 560. イタリック引用者]

マークス訳でマンハイム訳のイタリックで示した部分が完全に欠落しているのは一目瞭然だ。ここは狂人フルーリがクルシアルの遺骸に手を突っ込んでかき回すという暴挙に出たため、主人公が顔に死肉片や血飛沫を浴びてしまう場面で、初版でも空白化されることなく書見可能であった部分である。にもかかわらず、マークスは宗教上の配慮であろう、該当箇所をすべて削除し、前後の辻褄合わせをしている。イタリア語の有名な表現「翻訳者は裏切り者」は翻訳現場の事情を良きにつけ悪しきにつけ物語るものであるが、ここでのマークスは悪しき裏切り者以外の何者でもない。くわえてマンハイム訳と比較すると、中斷・省略符がほとんどピリオドに取って代わられているのも分かる。この3点符はセリーヌが『死』から多用しはじめた特有の句読点で、のちに文章のさらなる断片化とともに、畳み掛ける口語のリズムを司る要素となる¹¹⁾。マークスはこれも軽視したのである。

以上、簡単に『死』の英訳を比較したが、後発の強みもありマンハイム訳に軍配を上げざるをえない。彼は『死』の序文をこう締めくくっている――

30年前の人々はセリーヌの主題と文体に衝撃を受けたと私は言った。先の翻訳者は有能な職人であったが、彼もまた、少なくとも文体に衝撃を受けたのだ。しかし明らかにそれを間違いか、あるいはフランス語でしか考えられないものと見なしたのである。3点符とそれが表すものは大幅に削除されている。突然現れる感嘆符はセリーヌが拒絶した流暢なピリオドに置換されている。そして言語が著しいまで高尚になっている。私はセリーヌの文体観を伝えるよう試みた。¹²⁾

例えばマンハイム訳の出版者のひとりイギリス人ジョン・カルダーの証言のように、これを行き過ぎとみなす意見があったことも否定できない¹³⁾。しかしながら原著者が小説の伝統的な文体からの脱却を目指していたことを考慮すると、翻訳の言語や文体も読者に行き過ぎと思われてしかるべきだったのだ。

先述したスタンフォード・リュスによる『旅』の英訳比較のまとめは、ほぼそのまま『死』にも適応できると思われるので、やや長くなるが引用する――

マークスとマンハイムによる2つの版の相違点を理解するには、それぞれが翻訳さ

れた、もしくは（とりわけ）出版された2つの時代を認めなければならない——1934年のイギリス版、1983年のアメリカ版。50年の隔たりがあり、この間、印刷された言語と風紀には深い変化が起こったのだ。そのうえ両国には、とりわけ俗語のレベルにおいて、文化上・言語学上のずれがある。セリヌの同時代人で友人であったマークスは、当然のことながら原典により忠実な30年代の語彙を使用した¹³⁾が、それでも英語で同様の猥雑さを作り出そうとはしなかった。いっぽうマンハイムの翻訳には、戦前の俗語と、第2次世界大戦で兵士たちが使った言語や〈ビート・ジェネレーション〉の作家たちが使った言語の部分をなすより新しい語源の語との混淆が散見する。しかしながら彼は、しかるべき位置に猥雑な表現を入れることをためらわなかった。恥じらいには何も負っていなかったのである。アメリカの読者にとってこの1983年版はいっそう下品であるものの、より明確であるように思われる。不明瞭な箇所は殆どなく、フランス語が直接的に米語に置き換えられている。¹⁴⁾

＊

モーリス・ディックスティンが指摘したように、50年代末から60年代にかけてのアメリカは、『北回帰線』や『ロリータ』『チャタレイ夫人の恋人』など、発禁処分を受けたり、ようやく無削除版の刊行された文学作品が話題にのぼる時代であった¹⁵⁾。またニュー・アメリカン・ライブラリーやニュー・ディレクションズのように、気鋭の出版社が一般的でない作品の紹介に力を注いでもいた。「ヨーロッパのアンダーグラウンド文学界に衝撃を与え、現代のフィクションを刷新した小説の初完全無削除英訳」という惹句付きで登場したマンハイム訳『死』はこうした侵犯の文学の系譜に連ねられ、セリヌは新たな形での影響を英語圏に及ぼすことになったのである¹⁶⁾。

註

- 1) Louis-Ferdinand CÉLINE, *Journey to the End of the Night*, traduit par John MARKS, London: Chatto and Windus / Boston: Little, Brown and Co., 1934; Louis-Ferdinand CÉLINE, *Death on the Installment Plan*, traduit par John MARKS, Boston: Little, Brown and Co. / London: Chatto and Windus, 1938; CÉLINE, *Death on the Installment Plan*, traduit par Ralph MANHEIM, New York: The New American Library, 1966 (rééd., New York: New Directions, 1967); CÉ-

- LINE, *Journey to the End of the Night*, traduit par Ralph MANHEIM, New York : New Directions, 1983. このうち、本稿で引用した『死』は、マークス訳はチャットー・アンド・ウィンダス版、マンハイム訳はニュー・ディレクションズ版で、それぞれの略号 JM・RM と頁数を [] に入れて示す。なお仏語オリジナルは各訳者の底本が異なるため、初版と校訂版をもちい (Louis-Ferdinand CÉLINE, *Mort à crédit*, Paris : Denoël et Steele, 1936 ; CÉLINE, *ibid.*, in *Romans I*, édition établie par Henri GODARD, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1981), 略号 MC の後に頁数を初版 (校訂版) の順で併記し [] に入れて示す。
- 2) 『旅』の英訳検討については、次の論文を参照されたい—— Stanford LUCE, « *Voyage en langue anglaise : les traductions de Marks et Manheim* », in *Actes du colloque international de La Haye, 25-28 juillet 1983*, Paris : Bibliothèque de littérature française contemporaine de l'Université Paris VII, 1984, pp. 181-191 ; Pascal IFRI, « *Voyage au bout de la nuit en anglais : d'une traduction l'autre* », in *Actes du dix-septième colloque international Louis-Ferdinand Céline. Traduction et transposition, Milan 4-6 juillet 2008*, Paris : Société d'études céliniennes, 2010, pp. 183-198.
 - 3) Voir Jean-Pierre DAUPHIN et Pascal FOUCHÉ, *Bibliographie des écrits de Louis-Ferdinand Céline 1918-1984*, Paris : Bibliothèque de littérature française contemporaine de l'Université Paris VII, 1985, item n^{os} 34E1, 34E2, 38E4, 38E5, 49E1, 59E1, 66E1, 66E2, 66E3, 66E4, 66E5, 83E1, 68E1, 72E3, 72E4, 73E1. なお、マンハイム訳『死』は再刊過程で訳題を変え、現在に至っている (Louis-Ferdinand CÉLINE, *Death on credit*, Richmond : Oneworld Classics, 2008)。
 - 4) Pascal IFRI, « *Voyage au bout de la nuit en anglais : d'une traduction l'autre* », *op. cit.*, p. 186.
 - 5) Samuel PUTNAM, « Prelude to the Revolution », *Saturday Review of Literature*, 28 avril 1934, cité par Alice Y. KAPLAN et Philip WATTS, « Les vicissitudes de la traduction anglaise de *Voyage au bout de la nuit* et de *Mort à crédit* », in *L'Année Céline 1996*, Tusson & Paris : Éd. Du Lérot / IMEC, 1997, p. 307.
 - 6) Stanford LUCE, « *Voyage en langue anglaise : les traductions de Marks et Manheim* », *op. cit.*, pp. 181-191.
 - 7) jijつ邦訳では「女性性器」を意味する卑語がもちいられている。シリーズ『なしくずしの死』(上), 高坂和彦訳, 河出書房新社「河出文庫」, 2002年, 43頁。
 - 8) Voir CÉLINE, *Mort à crédit*, *op. cit.*, pp. 222-224. なお初版の献辞裏頁には「出版社の要請で、L・F・セリーヌはこの本からいくつもの文章を削除した。それは置き換えられなかったため、作中では空白部を成している」という但し書きが見られる (*ibid.*, p. 8)。
 - 9) 版面の実例とともに詳細は次を参照されたい—— KAPLAN et WATTS, « Les vicissitudes de la traduction anglaise de *Voyage au bout de la nuit* et de *Mort à*

- crédit*», *op. cit.*, pp. 310-312 et 318-319.
- 10) Voir CÉLINE, *Mort à crédit*, *op. cit.*, p. 670 (1076).
 - 11) この箇所の仏語原文では、感嘆符に続いて3点符が配置されている場合が多い。
 - 12) Ralph MANHEIM, «Preface» in CÉLINE, *Death on the Installment Plan*, *op. cit.*, p. xi.
 - 13) John CALDER, «Témoignage : Ralph Mannheim [*sic*], traducteur de Céline», in *L'Année Céline 1997*, Tusson & Paris : Éd. Du Lérot / IMEC, 1998, pp. 171-173.
 - 14) LUCE, «*Voyage* en langue anglaise : les traductions de Marks et Mannheim», *op. cit.*, pp. 181-182.
 - 15) Morris DICKSTEIN, «See change : Céline and the problem of cultural transmission», in *Céline, USA. The South Atlantic Quarterly*, volume 93, number 2, Durham : Duke University Press, 1994, p. 216.
 - 16) DAUPHIN et FOUCHÉ, *Bibliographie des écrits de Louis-Ferdinand Céline 1918-1984*, *op. cit.*, item n° 66E5.